

受賞報告

学 会 名：日本体育・スポーツ哲学会

賞 名：日本体育・スポーツ哲学会学会賞

受 賞 日：平成 30 年 9 月 2 日

受 賞 者：寺山由美

対象論文：「表現運動・ダンス」領域における「身体表現」

—「意図のある動き」の形成から捉え直す—

(『体育・スポーツ哲学研究』, 第 39 巻第 2 号, 95-108 頁, 2017)

受賞経緯：この賞は、平成 29 年度に公刊された日本体育・スポーツ哲学会の機関誌に掲載された論文の中から、最優秀のもの 1 篇に授与されるものです。

研究概要

本研究では、「表現運動・ダンス」領域の「身体表現」について、「私が動く」という視点から身体表現を検討し、「意図のある動き」の形成が身体表現になり得ることを明らかにしました。

本論では、表現の主体となる〈私〉について考察し、〈私〉が〈私〉として成立する背景を述べました。次に、その〈私〉の身体表現について、表現が他者と自己の二方向に向いていることを論じ、さらに、運動する〈私〉の身体は、〈私〉が見ることのできる「可視身体」と見るることのできない「不可視身体」とで動いていることを述べました。最後に、〈私〉が「意図のある動き」をすること、それ自体が身体表現となることを述べ、「表現運動・ダンス」領域において「意図のある動き」の形成が重要であることを論じました。

本研究は、体育における「表現運動・ダンス」領域において、何を教えるべきかという学習内容を検討するために行われました。指導方法を論じる以前に、身体表現とは何かを問い直しつつ、運動するという体育の独自性を踏まえて、体育における「表現運動・ダンス」領域の役割や意義を再考する必要があると考えました。

研究背景および目的

体育の授業で行われる「表現運動・ダンス」領域においては、学習者が身体表現を行うことを主たる内容としている⁵⁾。日本のダンス教育では、戦後から創作を主とする内容を中心に行ってきた。つまり、フォークダンス等の伝承系のダンスを除いて、学習者に動きを与えて踊らせるのではなく、学習者から動きを引き出すことを目的に授業を展開している。

では、「身体表現」とは何であろうか。幼児教育を専門にする谷は、身体表現とは『『こころ』と

もにある動きであり単なる形の動きとは違う」³⁾と述べ、身体で自己を語る方法であると説明している。加えて、『『表現』という言葉には、多くの誤解がある」⁴⁾とし、表現という言葉の響きが芸術作品や完成された見事な形式を想像させてしまうと述べている。しかし谷は、「見たもの、聞いたもの、ふれたものを、さっと出す。思ったこと、考えたことをそのまま出すこと」⁴⁾を表現と捉えている。このように表現を捉えると、身体は無意識のうちに表現してしまっているとは考えられないだろうか。滝沢は、人のしぐさについて言及している。彼は、身体の振る舞いとしてのしぐさは、品性なども含めたその人を表すと述べている。「多くの人が、無自覚のうちに『しぐさ』を、人の内面の判断材料にしてきた」¹⁾と滝沢が述べるように、しぐさを見てその人を見抜こうとしている。しぐさは、意識的にも無意識的にも現れてしまうからこそ、その人の内面が映し出されるのである。つまり、身体は絶えず他者へ何かを伝えているのであり、我々は無意識のうちに「身体が表現してしまっている」という状況に常にあるといえる。ダンス教育の場面では、谷が述べるように身体表現の成果として「作品」という形を求めることが多い。しかしながら、それ以前に身体が表現することについて、問い直す必要があるのではないだろうか。

そこで、本研究では、体育における「表現運動・ダンス」領域において、「身体表現」の学びの意義を明確にするために、「〈私〉が動く」という視点から身体表現を検討し、「意図のある動き」の形成が身体表現になり得ることを明らかにする。本論では、主体である自分のことを指して、〈私〉と標記する。その上で、表現の主体となる〈私〉について考察し、〈私〉が〈私〉として成立する背景を述べる。次に、その〈私〉の身体表現について、表現が他者と自己の二方向に向いていることを論じる。

さらに、運動する＜私＞の身体は、＜私＞が見ることのできる「可視身体」と見ることのできない「不可視身体」とで動いていることを述べる。最後に、＜私＞が「意図のある動き」をすること、それ自体が身体表現となることを述べ、「表現運動・ダンス」領域において「意図のある動き」の形成が重要であることを論じる。

まとめ

本研究は、「身体表現」を捉え直すことにより、「表現運動・ダンス」領域において「意図のある動き」の形成が重要であることを論じた。「表現」は、絵でも文章でも可能である。しかし、「身体表現」とは、身体で行われる表現に限定される。しかも、「表現運動・ダンス」領域で問題にしているのは、ゼスチャーや表情だけではなく、身体の動きによる表現である。学習者の「運動する身体」を捉える必要があり、滝沢のいう「身体運動を生じさせる主体としての身体」²⁾がどのように表現するかに着目しなければならない。＜私＞を成り立たせている身体は、目にみえる可視身体だけでは語り尽くすことはできず、不可視身体の動きを常に意識する必要がある。そのために、「意図のある動き」の形成を促すことで、＜私＞の不可視身体を知る手がかりにな

る。このような活動を通して、身体がどのように動いているかを＜私＞が知ることで、自明でない＜私＞を探索していくことにつながる。

「表現運動・ダンス」領域においては、「何かになる」「舞踊作品を創る」といったゴールのみではなく、「意図のある動き」のようにどう動くかという過程を学習する必要があるだろう。＜私＞が＜私＞の表現を、＜私＞が＜私＞の自我を自覚する、いわゆる「自己表現」の成立のために「意図のある動き」の形成を問うべきであろう。

引用文献

- 1) 滝沢文雄 (2002) 教科体育が担うべき身体文化の検討：しぐさを中心に. 体育・スポーツ哲学研究 24 (2) : 17-25, p.21.
- 2) 瀧澤文雄 (1995) 身体論. 不昧堂出版. 東京. p.25.
- 3) 谷祝子 (2007) 自己を語る身体表現. 冬弓社. 京都. p.75.
- 4) 同上書, p.77.
- 5) 寺山由美 (2010) 創作を主とする舞踊教育の生成過程－「与える」から「引き出す」授業への萌芽－. 舞踊教育学研究 12 巻 : 5-18.